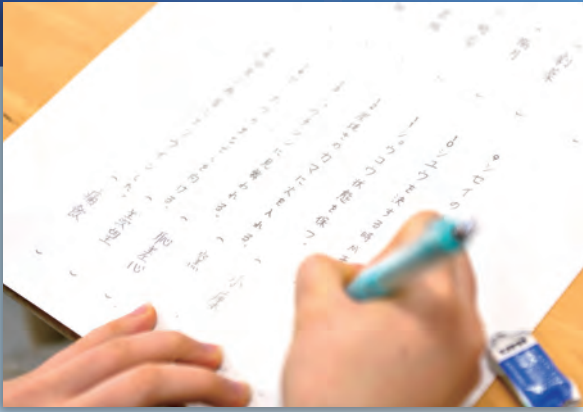


14:00 漢字テスト



授業は、漢字テストからスタート。同テストは、生徒を数人ずつに分けたグループが持ち回りで、学習範囲内から間違いやすい漢字を選んで作問する。作問過程で漢字の成り立ちなどに目を向けさせ、学習効果を高めるねらいがある。生徒相互に採点後、作問を担当したグループが、今回出題した漢字を選んだ理由や間違いやすい点などを解説した。

授業
ハイライト

●2年生「国語」の現代文で、評論を読み解く全9時間のうちの8時間目。評論『である』ことと『する』こと』について、各教科・科目の学習内容を用いながら、抽象的な文章の内容を具体的に説明する発表を行った。(P.37に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

現代文

評論をベースに各教科・科目を
つなぐ「リレー現代文」で、
豊かな思考力や発想力を育む

美田先生のアクティブ・ラーニング

教科の枠組みを取り払い、
思考を広げて深める学びを実現

東京都立戸山高校の美田恵先生は、知識構成型ジグソー法(※1)を活用して文章読解を行うなど、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れて授業改善を行ってきた。生徒は、素材文中から該当箇所を抜き出すような問題に解答することは得意だが、具体的に説明するような記



東京都立戸山高校

美田 恵 みた・めぐみ

教職歴6年。同校に赴任して2年目。

国語科担当。知識構成型ジグソー法などを活用しながら、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善を推進。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

東京都立戸山高校

◎「自主自立」の精神を重んじる都内有数の進学校。3年間、文理別のクラス編成をせず、総合力を育成する教育が特徴。文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校(現在4期目)。東京都教育委員会「進学指導重点校」「チーム・メディカル」指定校。

◎設立 1888(明治21)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2019年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、筑波大、お茶の水女子大、東京工業大、東京大、一橋大、京都大などに206人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ851人が合格。

◎URL <http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>

*1 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

14:15 各グループの発表①



前時までにグループでまとめた内容を各グループ3分間で発表。台本を用意して発表を分担したり、黒板に要点を書いたから発表したりと、グループごとに方法を工夫していた。発表は、「である」状態（権利など）は、「する」行為の継続によって保たれることなどを論じた評論の内容について、各教科・科目の学習内容を用いながら具体的に説明するというもの。

14:10 発表手順と注意事項を説明



前時までに作成した全10グループの発表資料とフィードバックシートを配布後、美田先生は、発表の手順や注意点を説明した。発表を聞く際には、発表しているグループから学ぼうとする意識を持つことの大切さを強調して伝え、フィードバックシートには、必ず全グループの発表について印象に残ったことや感心したことなどを、それぞれ記入するよう指示した。

述式問題は苦手であり、従来の講義形式の授業では、問いの本質を理解する力や表現力を育成することは難しいと考えたからだ。

そうした中、2019年度に参加した「STEM AMU プログラムハッカソン」(*2)で教科横断型の授業づくりを学んだことがきっかけとなり、現代文で教科横断型の授業を行った。

「授業で用いた題材から得られる考え方を広げ、またそれを深めるために、教科横断型の学びは有用だと考えました。加えて、学びを授業の中で閉じずに、他教科・科目の学習内容とのつながりを実感させることで、国語での学びがより楽しくなることも期待しました」

今回の題材である評論、丸山真男の『「である」と『する』こと』(P.37図で内容を解説)は、抽象度が高く、筆者の主張を捉えるためには、その文章を具体的に落とし込んで考える必要がある。そうした読解力を育成するために、美田先生が考えたのが「リレー現代文」だ。国語や数学、日本史など、10の教科・科目をグループで分担し、担当の教科・科目において「である」と「する」ことで説明できる事象を探し、発表し合うという授業だ。

思考の活性化・深化への配慮

「生みの苦しみ」を経験させて、 学びの本質の理解につなげる

生徒が「リレー現代文」をイメージできるよ

う、最初の授業では、夏目漱石の『現代日本の開化』を題材に、抽象度の高い文章を各教科・科目の知見を用いて具体的に言い換える活動を、美田先生が見本として行った。

「生徒が学びのイメージを膨らませてワクワクした気持ちを持てるかが、活動の成否を決めると考えました。そこで、『現代日本の開化』で述べられている日本の近代化について、美術や歴史で学ぶ事柄を用いて具体的に説明したところ、『自分もやってみよう』と、生徒の活動への関心が高まっているのを感じました」

担当教科・科目を決めるグループ分けでは、今回の題材の評論の内容と結びつけることが易しそうな公民などに生徒の選択が集中し、学びが広がらないことが懸念された。そこで、美田先生は、「つながりが見えにくい教科や科目に挑戦すると楽しいよ」と投げかけた。すると、約3分の1が理系の教科・科目を選んだ。

化学を選んだ生徒は、その理由について、「難しくてやりがいがありそうだったので、得意科目の化学を選びました。実際、本当に難しく、『である』『する』を説明するのに適当な事象を見つけないことに苦労し、『中和滴定』があたりそうだと気づいたのは、発表資料の提出期限日の前日でした」と話す。

知識構成型ジグソー法を用いて意味段落ごとに評論の本文を読解した後、グループでの考察を行った。そこで初めて、評論の内容を各教科・科目の学習内容と結びつけて考える難しさ

*2 経済産業省が推進する「未来の教室」事業の委託事業として、ベネッセが開催したSTEAMプログラムに関する教職員研修。

14:45 振り返り



美田先生は、「複数のグループに共通する大切な見方があったのは分かりましたか？」と問いかけ、その問いについてグループごとに話し合わせた。そして、「共通していた見方は、『筆者と違い、自分たちはこう考えた』といった批判的な視点です。筆者の主張が絶対と思わないことも大切です」と話し、次の授業ではそうした視点を深めることを伝えた。

14:30 各グループの発表②



他グループの発表で気づいたことは、フィードバックシートに記入。例えば、化学のグループが中和滴定とフロンガスによるオゾン層破壊の2つの現象を示し、化学の領域にも「である」と「する」の異なる性質が存在することを説明した発表に対して、「『である』と決めつけず、『する』ことによつて検証することが大切だと分かった」と書く生徒がいた。

に、多くの生徒が気づいたという。2時間分をグループワークに充てたが、多くのグループが最初の1時間では評論の内容を具体的に説明できる例を見つけられず、休み時間も話し合っていた。難題に立ち向かう生徒のチャレンジ精神を引き出したことが収穫だったと、美田先生は話す。

「その段階で生徒が苦勞すると予想していましたが、未経験の活動を通じて、与えられた問題を解く学習にはない、生みの苦しみを経験させて、学びの本質を理解させたいという思いがありました」

本時では、そうした過程を経てまとめた内容を発表した(図)。他グループの発表で気づいたことはフィードバックシートに記入。後日、美田先生がその気づきの内容をグループごとにまとめ、各グループに返すことで、自分たちの発表内容の振り返りを行えるようにした。

場づくりへの配慮

生徒の思考が熟するまで待ち、グループ学習を活性化させる

話し合いが停滞するグループがあっても、美田先生は待つことを心がけた。黙って話を聞き、時折、生徒のつぶやきを拾って「それは、どういうこと？」などと、あくまでも生徒が自身の考えを深めるきっかけをつくることに徹した。

「本校の生徒の多くは、1人で黙々と学習を

進めることが得意で、グループ学習をあまり好まないのですが、どのグループもしっかり話し合っていました。自分の力だけでは解決できない難しいテーマに取り組み、一人ひとりが考えを出し合い、議論を進める中で、『協働』の重要性に気づいたのでしょう」

成果と課題

粘り強さや忍耐力を發揮し、教科・科目の壁を乗り越えた生徒たち

本活動を通して、美田先生は生徒の強みを再認識したという。

「生徒は、私が思う以上に粘り強さや忍耐力を持ち、それらの力を發揮して教科・科目の壁を乗り越えていきました。途中で教科や科目の変更を申し出るグループもなく、どのグループもしっかり考え抜いて発表に至りました」

発表内容は、美田先生の想定を上回るものばかりだった。国語のグループは、夏目漱石の『こころ』や昔話『桃太郎』を「である」「する」の視点で読み解いて分かりやすく説明し、理系の教科・科目のグループも、説得力のある論理を展開していた。地学グループの生徒は、次のように語った。

「人間がない時代は、地球は常に『である』の状態と言えます。そうした状況において、人間がいかに『する』の状態を持ち込んだのかを考えました。同じ日の保健体育の授業で、酸性

単元の指導計画

【教科・科目】国語・現代文B 【分野・単元】評論 【テーマ・作品】丸山真男『『である』ことと『する』こと』

【設定時数】全9時間の中の8時間目 【単元目標】試行錯誤を通して学問の基本姿勢を体感する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 夏目漱石『現代日本の開化』をA4判1枚に要約する。 授業者による「リレー現代文」のデモンストレーションを聞き、これから取り組む学習について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 文章のつかみ方を学ぶ。 自分たちがこれから何をやるのかを把握できる。 「各分野で読み解く」とは、どういうことかを理解する。 【知識、思考力】	<ol style="list-style-type: none"> 夏目漱石『現代日本の開化』を各自で読み、要約する。 授業者による「リレー現代文」のデモンストレーションを聞く。 各自、再度文章を読み、読み方が変わったかを確認する。 	【主体的な学び】 これまでとは異なる学問へのアプローチの面白さを味わう。 【深い学び】 これまでの評論読解とは異なる、他教科からのアプローチの手法を知り、着眼点を多様化する。	<ul style="list-style-type: none"> 要約シート 観察
5・6	<ul style="list-style-type: none"> 「リレー現代文」の内容をグループで考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 評論の内容を多様な文脈で表現することができる。 【技能、思考力、表現力、多様性、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> 題材の評論を、担当する教科・科目にどう引きつけるかを、グループでじっくり考える。 見当がつけいたら、資料を作成し始める。 	【主体的な学び】 評論を各教科・科目の文脈に落とし込むことで、評論への理解が深まることを実感する。 【深い学び】 まずは耳を傾け、細かいつづやきを教師が拾うことで、一つひとつのつづやきをグループで掘り下げていく。	<ul style="list-style-type: none"> グループワーク
7	<ul style="list-style-type: none"> 知識構成型ジグソー法の形式で、各意味段落の内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 評論の内容を自分の言葉で的確に相手に伝えることができる。 【思考力、表現力、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> グループ内で1人1つの意味段落を分担。意味段落ごとに担当者が集まって新しいグループとなり、その意味段落を読解する。 元のグループに戻り、1人3分間で担当の意味段落を説明。 	【対話的な学び】 自分の担当段落をグループのメンバー全員がよく分かっていないといった状況で、ほかのメンバーに伝わるよう、より言葉を尽くして語ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 観察
8	<ul style="list-style-type: none"> リレー形式で、各グループが発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの発表内容を効果的に伝えることができる。 【思考力、表現力、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> 各グループ3分間で、全体に向けて発表する。 発表で気づいたことは、「フィードバックシート」に記入する。 	【主体的な学び】 的確な表現で、大勢の他者に向けて説明する。	<ul style="list-style-type: none"> 観察 発表資料 フィードバックシート
9	<ul style="list-style-type: none"> 最終意味段落を全体で確認。 全員の発表内容を綴じ込み、「解説書」としてフィードバックする。 	<ul style="list-style-type: none"> 評論全体の内容を理解することができる。 【知識、思考力】	<ol style="list-style-type: none"> 最終意味段落を音読し、適宜分かりにくい部分がないかの最終確認をする。 これまでのすべての資料をひとまとめにして全員に配布する。 	【主体的な学び】 同じ趣旨の話それぞれがどのように表現しているかを楽しむことができる。 【対話的な学び】 同じ趣旨の話他者がどのように表現しているかを比較できるか。 【深い学び】 最終意味段落の内容について「現在」における具体例を考える。	<ul style="list-style-type: none"> 発言 ペアワーク

*美田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全9時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

☒ 題材の評論の内容、及び各グループの発表内容

◎ 評論の内容

近代社会は、前近代社会の身分的秩序を支えた状態重視の「である」論理から、運動や過程重視の「する」論理への移動によって生まれた。しかし、近代日本では「である」価値が依然として根を張っている現状もあり、「する」論理と「である」論理との間に挟まれた日本人は、一種のノイローゼ状態に陥っている。

◎ 各グループの発表内容（抜粋）

公民 主に日米の憲法の制定・改正過程から、両国の違いを分析。日本国憲法の制定過程には、GHQなどの意向が強く反映されている上に、各国の憲法改正回数を比較すると、アメリカ27回、ドイツ57回などに対して日本はゼロである点にも、「である」の色合いの強さが表れていると指摘した。

数学 「『+』は足すこと、『-』は引くことを意味するように、『である』論理だけに見えるが、ある目的下では符号や演算の記号になるなど、特定の意味を持つ『する』論理になる」といった論理を展開。「一見関係のない数学にも応用できると分かって面白かった」「数学の見方が変わった」といったコメントがあった。

雨について学びました。酸性雨は、人間の活動によってもたらされたものです。『する』で説明できると考えて、論理を組み立てました」

また、複数のグループが、題材の真意を的確に捉えて論じた上で、筆者と自分たちの考えは異なるといった批判的な見方を提示した。美田先生は、その気づきを大事にしたいと、単元の構成を変更した。

「今回取り上げた評論が発表されてから半世紀以上が経ち、文中の『現代』『近代』などは、今を生きる私たちにとって意味が少し異なります。その気づきをさらに深めさせたいと考え、授業を1時間増やし、現在を『である』『する』論理で改めて見つめ直す学習を行いました」

今後の課題は、他教科・科目との連携だ。今回は、美田先生が他教科・科目の教科書などを読み、生徒の発想を想定した上で指導計画を立てて授業に臨んだ。いずれは、生徒が国語の授業中に、他教科・科目の教師に直接質問する場を設け、より専門性の高い学びにつなげたい考えだ。さらに、生徒自身が各教科・科目のつながりを意識して学べるようにするため、今回のような授業を1年次から行うことも目指す。

「教科横断の学びを通して育まれる思考力や発想力、協働性などは、学びの土台としてこれからの人生で生きるものであり、何より学びの楽しさを一層感じられると思います。私自身が楽しむことを忘れずに学び続け、そうした授業づくりに取り組んでいきます」